

平成26年度 県立芦屋高等学校 学校評価結果

1 学校経営のテーマ

「ドラマティック(Dramatic)・ドラスティック(Drastic) 声高 ～同一方向への力の和～」
 Drastic…声高生たちが「積極的に学び、学びの意欲の機能の継続」できるように取り組むとともに、様々な舞台でドラマティックに活躍できるよう、指導を工夫しながら声高生の個性や能力を伸ばし、「確かな学力」をつける。
 Drastic…創立74周年の伝統に基づく新たな学校文化をドラスティックに創造するとともに、元気で明るく生き生きとした学校づくりを目指す。あわせて本校教育の良さを魅力やメディアを通じて徹底して広報する。
 ○めざす声高像 教育綱領「自治」「自由」「創造」の具現化と新たな伝統文化の創造
 ・高貴な人格と確かな学力を育む「学び」を徹底する学校
 ・地域の伝統校として期待され信頼される学校
 ・不易と流行、温故知新の気概が息づく学校
 ○めざす声高生像 論理的な思考ができ、自由で柔軟な発想ができる生徒
 ・変化の激しい時代において、様々な困難や課題に果敢に挑戦できる生徒
 ・志を高く掲げ、したたかにそしてしなやかに努力ができる生徒
 ・「時を守り、場を清め、礼を正す」ことのできる、こころ豊かで自立した生徒

2 本年度の重点目標

- (1)「生きる力」を育み、一人一人の自己実現を目指したキャリア教育の充実
- (2)基礎・基本の確実な定着と活用する力を育成し、確かな学力の確立及び個性や創造性を伸ばす教育の充実
- (3)教職員としての資質と実践的指導力を向上させ、教職員の協働体制による学校の組織力の向上
- (4)地域に信頼され、地域の期待に応える開かれた学校づくりの推進
- (5)自治・自律の精神及び命と人権を尊重する「心の教育」の推進と豊かな人間性の育成
- (6)防災教育及び安全教育の推進と豊かな共生の心の育成

3 総合的な自己評価

1 昨年度は全項目でB評価であったが、今年度は「1年次の早い段階から自らの進路を考え、高い目標にチャレンジする姿勢を養成する。」についてC評価となった。これは、昨年度は辛うじてB評価となっていた部分である。具体的には、補習の効果やテストを通じた努力に尋ねる質問について、生徒よりも保護者、さらに教員にかけて低評価になっていくことが特徴である。生徒が考えている以上に補習やテストを通して学力向上につなげられていないことに大人の評価の厳しさが表れていると考えられる。しかも、教員が際だった低評価をしていることについては、これらの取り組みそのものが欠如しているからなのか、若しくは、さまざまな取り組みが効果的になされていないという意味なのかなど、現状の分析を詳細行い、プラスの方向での職員一丸となって取り組んでいくようにしなければならない。

2 保護者に学校評価項目に挙げられている教育活動について認知の度合いが低い。今年度途中から学校HPがリニューアルされたり、ブログ配信が始まり、芦屋高校についての情報について格段にご利用頂きやすくなったが、年度途中であったこともあり、これらの新サービスについての認知があまり高くない現状である。年次通信や保護者会などを通じて一層、知って頂けるように努力が必要である。

3 生徒の自治の自覚についての生徒および保護者と教員間の評価の隔たりが大変大きい現状が続いている。この差の原因として、教員が生徒の活動をサポートできていないことや、生徒は時代の流れの中で自然に変化している部分を古い固定的な観点で教員が評価していることも関連しているのかもしれない。今後の教員研修などを通じて生徒理解を進めるとともに、一層協働体制をすすめていくようにしなければならない。

4 重点目標別自己評価結果

重点目標	目指す姿	実践目標(評価指標)	評価方法	達成状況	達成段階	改善の方策
「生きる力」を育み、一人一人の自己実現を目指したキャリア教育の充実	自己肯定感を育み、主体的に進路を考え、社会に貢献できる力を身につける。	1 各年次で「進路のしおり」を活用したLHR、進路説明会及び「AUSS仕事ナビ」「AUSS進路ナビ」「AUSSキャンパス」「AUSSインターンシップ」を活用して、進路選択の幅を広げる情報提供を行う。 2 進路閲覧室の整理・充実により、進路情報の積極的に提供に努める。 3 1・2年次において「声高手帳」を活用し、自己管理能力を高める。 4 1年次において「声高タイム」の学習内容を充実させ、自らの進路意識を高めるための職業観や論理的思考力を向上させる。 5 各年次独自の進路意識向上のための取組みを企画・実践する。	○進路LHR、進路説明会、「AUSS仕事ナビ」「AUSS進路ナビ」「AUSSキャンパス」「AUSSインターンシップ」の実践内容及び満足度の調査 ○生徒の進路閲覧室の使用頻度と満足度の調査 ○「声高手帳」の活用度及び満足度の調査 ○「声高タイム」での自己評価 ○各種進路意識向上の取組み内容と満足度の調査	○各種進路行事については、興味・関心の高い生徒が多く、良好な成果を収めている。「進路のしおり」はさらに活用した取組みが必要である。 ○昨年度、進路閲覧室を生徒が利用しやすいように大幅な改装が行われたので昼休み・放課後などに積極的な利用状況がなされている。 ○多くの生徒は「声高手帳」をスケジュール記入のために活用しているが、学習欄を恒常的に記入することができていない。 ○「声高タイム」では、学問の系統や職業への意識が生徒の間で概ね養成できている。 ○今年度より、1・2年次では大学見学・企業訪問を実施して、特に理系生徒の進路意識の向上を図っている。	B	○「進路のしおり」には進路の基本情報が網羅されており、LHRでの更なる活用を計るべきである。 ○「声高手帳」を生徒がより能動的に活用するために、表紙デザインのコンテストや利用の啓発週刊など定期的なキャンペーンを企画するなどの取組みが期待される。 ○進路課と年次が連携して、進路指導室でのHRや面談などの新たな利用方法を検討していくべきである。 ○「声高タイム」では、ディベート体験が改良されており、さらなる充実が期待される。
	自ら学ぶ意欲と達成感を持ち、自己の可能性を広げるために、幅広い教養を身につける。	1 「シラバス」「ガイダンスブック」の充実を図り情報提供を効果的に行うとともに、志望進路に応じた科目選択の指導を徹底する。 2 科目選択及び進路指導に関する保護者との連携を密にする。 3 各年次と関係課が情報を共有するとともに、連携強化を図る。	○「シラバス」「ガイダンスブック」の使用頻度及び内容満足度 ○進路指導、科目選択指導に関する個人面談・保護者面談の実施回数及び内容満足度の調査 ○各年次と関係課による協議会の実施回数及び満足度の調査	○新2・3年次の進路及び選択科目調査において、「シラバス」「ガイダンスブック」を有効的に利用し、生徒への進路指導を実践できている。 ○生徒・保護者との三者面談は全員に対して実施し、学校生活全般における教員とのコミュニケーションは良く図れている。 ○1・2年次では、進路及び科目選択調査において、資料面や指導手順についてガイダンス課と、年次集会における講話及び資料準備等で進路課との連携が十分に行うことができた。 ○3年次においては、就職・大学等志望別進路ごとに、進路課と3年次団の間で資料提供・情報交換を行うことができた。	○「ガイダンスブック」は主に1年次生用であるので、さまざまな表記をわかりやすくする必要がある。 ○三者面談については、今後も生徒や保護者の志望や質問に十分対応できるよう、各課と年次団の連携強化を維持し、情報交換を緊密に行う。	B
基礎・基本の確実な定着と活用する力を育成し、確かな学力の確立及び個性や創造性を伸ばす教育の充実	家庭学習を習慣化させ、学ぶ意欲・意識を高め、目標に応じた主体的な学習を定着させる。	1 前後期制を活かし、授業時間の確保を図る。 2 効果的な宿題や週末課題を与え、予習・復習の成果が実感できる授業等を行うことで家庭学習の時間を増やし、自学自習の習慣を育成する。 3 1年次より計画的に小テストを実施して基礎学力の向上を図る。 4 1年次より計画的な補充・補習授業を実施し、積極的に低学力生徒の学力補充を図る。	○今年度の授業時間数調査と昨年度以前との比較 ○宿題及び週末課題の実施状況及び自己評価、家庭学習時間の調査 ○小テストの実施状況及び自己評価 ○補充・補習授業の実施状況及び生徒の出席率の調査 ○基礎学力を見るテストの結果分析	○授業日における曜日の多寡による科目間の授業数差の是正はできていない。 ○「自学自習の習慣ができてい」と考えている生徒は過半数いるが、学校での課題を自力で丁寧に、期限までに行って提出できていない生徒も多い。 ○国語・数学・英語の小テストを実施しているが、事前に準備してテストに望む生徒は多くない状況である。	B	○年間行事については、精選するとともに、計画段階で特定の曜日に集中しないように注意しなければならない。 ○「自学自習の習慣」の定着化を図るために、予復習や提出課題の成績評価への算入のあり方などを改善していく。 ○小テストについては事前学習してこない生徒が多いことについては、平素の指導、テストの範囲・形式の問題、評価への算入の仕方などを十分協議する必要がある。
	1年次の早い段階から自らの進路を考え、高い目標にチャレンジする姿勢を養成する。	1 学校設定科目や学習指導要領の研究を推進し、特に2・3年次においてさらなる特色ある教育課程の編成を検討する。 2 進路課・各年次が中心に計画的に補習授業を実施し、生徒の学習意欲の向上に努める。 3 模擬試験等の分析を各教科・年次を中心に実践し、その結果を職員間で共有してより良い授業づくりを行う。	○学校設定科目・高大連携講座を中心とする選択科目の受講人数及び満足度の調査 ○補習授業数、出席者数及び満足度の調査 ○模擬試験の成績分析及び成果	○高大連携講座を選択する生徒が少ない。 ○3年次生になると進路意識が高まり補習への意欲が向上している。 ○従来の模擬試験の分析が、成績変動・過年度比較、弱点分野の指摘に留まりがちだったが、生徒の学力向上のために学力向上プランを試行して具体的な数値目標を設けて取り組み始めた。	○高大連携講座の良さを生徒にアピールし、開講講座の多様化や、開講時間帯の検討なども含めて考えていくべきである。 ○進路課・各年次・各教科の連携を強化して、補習講座及び内容を充実化し、年次ごとに実施講座にばらつきが出ないようにする。 ○生徒に積極的な参加を喚起するとともに、HPや年次通信を通じたPRも必要である。 ○補習を熱心に行っている科目も多いので、補習を行っていることを知ってもらうだけでなく、補習に参加した生徒がいかに関心の補強につながったのか、相関性についての分析も行う必要がある。 ○補習は希望制であるので、授業よりも出席管理が甘く、生徒の中には、参加意欲が低下しやすくなっている面があるように思われる。補習の継続的出席について強く呼びかける必要がある。 ○模擬試験について、数値目標を掲げる取り組みを試行したので教師間の協働体制を拡大して、成果があがった取り組み方法について情報共有していきたい。	C

教職員としての資質と実践的指導力を向上させ、教職員の協働体制による学校の組織力の向上	教員が授業改善に積極的に取り組み、生徒の授業満足度を高め、学力の向上に努める。	1 シラバスに基づく学習指導計画と指導内容の統一を図る。 2 分かる授業、意欲を高める授業の実施に努め、生徒が自身の実態・弱点を知り、意識改革をする環境を作るように援助する。 3 教科を越えた授業公開週間や授業研究会を開き、教員相互の授業改善を学校全体で推進する。 4 生徒等による授業評価アンケートを学校全体で推進し、授業改善の一助とする。	○シラバスの使用頻度、シラバスの内容と実際の授業内容との比較検証 ○授業相互参観や研究授業の回数及び実際の参観者数の調査 ○授業評価アンケートの実施回数及び内容の検証	○概ね「シラバス」に基づく学習指導計画の立案、及び学習の実践は行えている。 ○昨年度より、「授業公開週間」を実施しているが一部教員間で止まっている。 ○3年次では教科によって生徒への授業評価アンケートを実施できたが、他の年次では不十分であった。	B	○最初の授業では、「シラバス」を使用したガイダンスを実施して、生徒に学習内容・課題や小テストの実施・評価の算出方法を説明する。 ○「公開授業週間」での授業参観教員数及び教員間アンケート数の伸長を計る。 ○「授業評価アンケート」の実施から処理までを簡素化して、多くの教員が長期間にわたって調査できるように改善していく必要がある。
	教員は生徒を把握し、自己研鑽を重ねるとともに、組織的な教育力を高める。	1 生徒指導に関する教員の共通理解を推進する。 2 生徒への声掛けや会話を通して日常的な教育相談活動(カウンセリングマインド)を充実させる。 3 進路指導に関する教員の共通理解を推進し、3年間を見通した進路計画を協働的に実践する。 4 生徒情報の速やかな交換と情報共有の徹底を図る。 5 生徒指導・進路指導を中心に教員研修会の一層の充実を図るとともに、研修内容の積極的な活用を図る。	○生徒指導申し合わせ事項の認知度調査 ○進路指導計画の認知度調査 ○教員研修会の実施状況及び活用状況の調査	○保健室から生徒への声掛けや相談については、一定の成果が見られた。 ○いじめ問題について職員研修を実施し、一定の成果が見られた。 ○進路指導の研修は外部講師を招いて実施できた。今後は生徒指導に関する研修会も必要である。 ○進路指導の年間計画については、職員全体に周知されているが、職員の中に長期ビジョンに従って取り組む意識が若干不足している。	B	○生徒指導申し合わせ事項による教員の共通理解を深め、効果的な生徒指導を実践する。 ○保健室のみならず、教員が親身になって対応すること・関わりを持つことを重要視する。 ○生徒指導・進路指導について、毎年実現可能な数値目標を研修会等で設定し、その実現に向けて、全教員が協働できる体制を構築する。

重点目標	目指す姿	実践目標(評価指標)	評価方法	達成状況	達成段階	改善の方策
地域に信頼され、地域の期待に応える開かれた学校づくりの推進	保護者・地域社会が常に学校の教育活動を知る機会を持つことができ、学校との信頼関係がある。	1 学校HPや「年次通信」等の広報紙、公開授業等の実施を通じて、時機に応じた情報を家庭や地域に発信する。 2 計画的に保護者会や保護(三者面談)を実施する。 3 記念祭・学校説明会・オープンスクール・オープンハイスクールを実施し、分かりやすい学校紹介等を推進する。 4 組織的な中学校訪問の実施など、中学校との連携を図る。	○学校HPの更新回数・アクセス数及び満足度の調査 ○各種広報紙の発行回数及び満足度の調査 ○保護者会・保護者面談の実施回数及び満足度の調査 ○記念祭・学校説明会・オープンスクール・オープンハイスクールの実施状況及びアンケート結果分析 ○中学校訪問の回数と内容の分析	○学校HPについては、今年度中かけて新しいフォームを検討してきた結果、年度の後半に全面的に改良されたが、評価アンケートの事後であったため、反映されていない。 ○生徒・保護者・教員による三者面談の実施については、良好な結果を収めている。 ○各年次・進路課・保健課による各種広報紙はよく発行されており、保護者に概ね伝わっている ○自治会執行部を中心に、生徒主体による学校紹介をよく行っていることは高く評価できる。 ○昨年より多く中学校を訪問し学校PRに努めることができた。	B	○学校HPが全面的にリフォームされて利用の便が図られた。また、新たなトピックについてはブログ配信により一層速く伝えられるようになった。しかし、保護者にはこれらの発信が十分に伝わっていない部分があるので、今後は広報活動を通じてより知ってもらえるようにすべきである。 ○オープンハイスクールのさらなる内容の充実を目指す。 ○自治会による活動をより活性化するために、自治会執行部と関係各課との綿密な協議や連携が必要である。
	地域社会の一員として高く評価される学校となる。	1 クリーンアップ作戦等、PTA・地域との連携を強化する学校行事を推進する。 2 地域へのボランティア活動に部活動を中心に積極的に参加する。 3 教育活動において、幼稚園児・保育園児との交流を進める。 4 地域オープン講座等、開かれた講座の充実を図る	○PTA・地域と連携を強化する学校行事の実施回数及びアンケート結果分析 ○地域へのボランティア活動への参加状況の調査 ○地域の幼稚園児・保育園児との交流状況の調査 ○地域に開かれた講座の実施状況の調査	○吹奏楽部・ボランティア部・茶華道部・自治会等により、地域ボランティア活動が昨年よりも活発に行われている。 ○「芦屋モダニズム」の授業が芦屋市のオープンカレッジとして地域の方々に開放され、市民の方々にも受講して頂いている。	B	○学校HRや全校集会、年次集会、年次通信等での案内、ポスターの製作など、様々な活動を校内でアピールする。 ○PTA・同窓会との連携も一層図っていく。 ○地域に開かれた講座については、PTA、各地域団体との協議を行った。教員については、その重要性の共通理解も図っていくことが大切である。
自治・自律の精神及び命と人権を尊重する「心の教育」の推進と豊かな人間性の育成	集団生活において、お互いを尊重し責任ある行動を取り、自らを律し、規則正しい生活を送り自分自身を高める生徒を育成する。	1 規則正しい家庭生活を励行し、無断欠席・遅刻・早退を行わせない。 2 挨拶運動を推進する。 3 通学時のマナーの向上を図る。 4 生徒の服装・頭髪等身だしなみを整える。	○無断欠席・遅刻・早退生徒人数の調査 ○生徒生活実態調査の分析及び教員の指導状況 ○保護者との懇談による生活実態の把握 ○苦情報告件数及び改善状況の調査	○80%の生徒・保護者は「自治」の自覚をもってマナーを守られていると考えている。 ○一方で生活指導に関する教員による自己評価は低い状況である。 ○生徒課教員の呼びかけにより、生徒の登下校時や学校生活での風紀面のマナー意識を高める取り組みが始まっている。今後、一層の年次との連携や、自治会による生徒主体の取り組みなども考えていく必要がある。	B	○無断欠席者はほとんどいないが、遅刻者は一定数を存在している。全教員による指導体制を統一して行う必要がある。また、絶えず保護者との連絡を緊密に行い、家庭での協力を得ることで、規則正しい生活を送れるように指導する。 ○自治会執行部が、「自治」の本来の趣旨に則り代議員・各部活動幹事等とも協議し、自ら考えて律することができる活動を推進させる。その際には、教員側も生徒が活動していくための指導・助言が現在では必要である。
	「自治」「自由」「創造」の教育綱領のもと、自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力を高める生徒を育成する。	1 自治会行事や部活動において、生徒の成就感を育成する指導を徹底する。 2 生徒課を中心に、教員全体で生徒の自治能力の育成を図る。 3 クラス・年次が学校の基礎となることを自覚し、自ら進んで学校作りに働きかける力を育成する。 4 美化委員会を中心に美しい学校づくりに取り組ませる。	○部活動参加率及び活動状況に関する調査 ○生徒生活実態調査の分析及び教員の指導状況の調査	○記念祭・体育祭をはじめとする自治会行事及び部活動を活発に行っている状況は、生徒・保護者に高く評価されている。これらの活動を通して生徒の自尊感情を高める効果は大きいと考えられる。 ○これらについて教員と生徒・保護者と評価の差があるが、教員の生徒に対する指導やサポートが不足していることの表れともいえる。	B	○自治会活動に関する、担当教員の負担は大きくなってきているので、年次の教員との連携を一層深めていく必要がある。 ○生徒の自治意識は浸透しているため、教員は自治会活動に関して、生徒の後ろを中心的に支えながら、時には立案の段階でアイデアを提示するなどして生徒が主として活動しているスタイルを維持しながらも、企画を進めていけるようにすべきである。
防災教育及び安全教育の推進と豊かな共生の心の育成	地域及び関係機関と連携した兵庫の防災教育の充実に努める。	1 震災を教訓として、地域等と連携した防災訓練を実施する。 2 自然災害を想定し、生徒各自が周囲を慮ることができる防災教育を実践する。	○有効的な防災訓練及び防災教育の実施状況調査	○今年は地域に開かれた防災訓練を数回にわたって実施できたので、保護者の認知度も上昇した。	B	○地域自治体・保育園と共同した南海トラフ地震に対応した避難訓練を実施したことで、学校と地域の連携の強化が図られた。 ○生徒たちは南海トラフ地震を想定した防災訓練の対応に慣れできたが、今後は、自分で考えて動けるように意識を高めたい。
	生徒の心のケアに対応する校内の教育相談体制の整備に努める。	1 保健講話を行って、薬物乱用が身体に及ぼす影響について、生徒の意識を高める。 2 カウンセリングマインドを持ち、心を痛める生徒を早期発見して、関係課と年次団が連携を強化して対処する。 3 教育相談委員会を活用し、各生徒が心身ともに健康的な学校生活を送れるように最大限の努力を行う。	○保健講話に関するアンケートの実施及び分析 ○スクールカウンセリングの活用状況の調査 ○教育相談委員会の活用状況の調査	○保健講話を通じて、ほぼ全員の生徒が、身近に薬物がある現状や、服用による危険性について詳しく理解し、意識を高めることができた。 ○生徒の心のケアに対する教育相談体制において、保健課内教員の生徒に関する情報交換及び早期対応は一定の成果があったが、関係課教員との連携や対応をさらに進めなければならない。	B	○保健講話の内容を学校HP等を活用して保護者にもっと知っていただけるようにしていくべきである。 ○日頃から保健課・生徒課・当該年次団の教員が中心となり、全教員による連携や生徒の情報交換を行いながら、早期発見・対応を心掛ける。 ○教育相談委員会を定期的に開催して、該当生徒の情報交換を行いながら早期対応にあたっていく。 ○今後、危険ドラッグを含めた薬物の危険性についても啓発していく必要がある。